

看護学科における模擬患者参加型授業とOSCE の実施・評価（その4） 模擬患者の育成と授業への参加

著者	渋谷 雅美, 竹生 礼子, 齊藤 美沙, 伊藤 道子, 明野 聖子
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部学会誌
巻	12
号	1
ページ	93-98
発行年	2016-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00010466/

[資料・その他]

看護学科における模擬患者参加型授業と OSCE の実施・評価（その4） — 模擬患者の育成と授業への参加 —

渋谷 雅美, 竹生 礼子, 齊藤 美沙, 伊藤 道子, 明野 聖子

北海道医療大学看護福祉学部看護学科

キーワード

模擬患者, 模擬患者参加型授業, OSCE, 看護実践力

I. はじめに

先の報告でも述べたように, 看護基礎教育機関には, 援助的人間関係を形成するためのコミュニケーション技術を含んだ看護実践能力の育成に取り組むことが求められている。これは, 単なる情報収集・情報提供のためだけではない, 患者の立場に立った「コミュニケーションスキル」を身につける実践的な教育方法が重要となっていることを示す。そのためには看護学生が, 対象者の状態や行為・言葉を適切にとらえ, 知識として理解していることを, 対象者に合わせて表現できるトレーニングが必要である (日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会, 2009)。その教育方法のひとつとして取り入れられたのが, 模擬患者参加型授業である。

患者役として学生の学びを進める重要な役割を務める模擬患者 (standardized patient, simulated patient, 以下 SP とする) を育成し, 効果的に授業に参加できるようにマネジメントを行うのが, SP 班の教員 (表 1) の役割である。本稿では, 模擬患者参加型授業と客観的臨床能力試験 (objective structured clinical examination, 以下 OSCE とする) に参加した SP の育成過程と授業および OSCE への参加の実際について報告し, その評価から SP 参加型授業の意義と今後の課題について考察する。

II. SP 育成と活動の軌跡

1. SP 育成の役割

看護学科で演じる SP には, 自由模擬患者 (simulated patient) と標準模擬患者 (standardized patient) がある (鈴木・阿部, 2011)。自由模擬患者は, 授業内でコミュニケーション練習や技術演習において患者役を演じる。ある程度の自由さがあり, あとで患者として感じた思いを学生に言葉で伝える (フィードバックする) 役割を担う。一方, 標準模擬患者は OSCE で

の評価が目的で, 大勢の学生に対して公平であるために, 模擬患者全員が同じシナリオで, 決められた情報をもとに同じ人物を平等に演じる。発言は決まっておらず, 自由さはない。

両者の役割を理解し, 効果的に看護学科の学生の学習に参加できるよう, SP の導入の準備, 参加調整, 授業・試験への参加の準備と実施, 効果の評価をすることが, 教員の役割であった。SP が学生の教育に参加することにより, 市民感覚を学生に伝えること, 将来の医療を担う人材を市民とともに育てること, 地域の大学として市民と学生・教員が交流する開かれた教育の場を提供するといった意義がある。

2. 活動の軌跡

1) 平成24～25年: SP 導入の準備

(1) 情報収集

看護学科の授業に SP を導入するに当たり, 歯学部・薬学部で実施されている SP を取り入れた授業の見学, SP の育成に携わっている歯学部の担当教授の指導をあおいだ。また, 看護教育に SP を活用している他大学の見学を行った。

歯学部・薬学部の教育に活用されている同じ SP を, 看護教育に導入するに当たり, 伝えるべき内容を検討した。歯学部・薬学部の活用場面は, 医療面接が中心であるのに対し, 看護学科では, 血圧や脈拍の測定, 症状の観察, 説明, 更衣の援助など, 直接的ケアに当たる場面への SP の参加も想定される。看護とは

表 1 平成24年～27年度における SP 班の構成メンバー
(五十音順)

平成24年度	明野聖子, 伊藤道子, 竹生礼子
平成25年度	明野聖子, 伊藤道子, 竹生礼子, 中村ゆかり
平成26年度	明野聖子, 伊藤道子, 齊藤美沙, 竹生礼子
平成27年度	齊藤美沙, 渋谷雅美, 竹生礼子

<連絡先>

渋谷 雅美

北海道医療大学看護福祉学部看護学科

何かについて、SPが理解できるように説明の準備を行った。

(2) 既存のSPグループの活用

北海道医療大学の歯学部・薬学部で活動している既存のSPを活用した。このSPは、平成16年に現代的教育ニーズ取組支援プログラムの予算を活用して歯学部が組織した「当別SP研究会」のメンバーである。当別町内エリアの新聞の折り込チラシ等にて町民に対し募集し参集した。当初は、歯学部全体で育成・運用に取り組み、作成したシナリオ集をもとに、SPにトレーニングを行ってからSPを活用した医療面接に関連した授業を組んだ。歯学部でトレーニングされ授業及びOSCEに導入されたSPは、薬学部にも活用されるようになり、さらに看護福祉学部、リハビリテーション科学部へ広がった。

(3) 看護学科SPの育成

① SPの構成

「当別SP研究会」の組織の位置づけは、歯学部千葉教授が運用する会となっており、自主的な組織ではない。現在、特に代表者は設けておらず、メンバーは対等である。メンバーは、おおよそ30人であり年齢は40～50歳代が中心、最高齢は70歳代前半でほとんどが女性である。「当別SP研究会」メンバーの就労のパターン、健康状態等、演習・OSCEへの参加可能性については、会議等の打ち合わせの中でとらえた。メンバーの現職は、主婦・農業・歯科医・パート従事者など多様である。これまでの職業歴など、具体的な背景は把握しないが、かつて教員や社会福祉協議会での勤務経験のあるメンバーもいた。当初のSP募集以降、大規模な参加者募集は行わず、メンバーからの紹介で構成員が不足にならないようにしていた経緯がある。

看護学科の演習への参加を機に、旧来のメンバーが友人を誘う形で新たにSPとして参加した人が数名いた。歯学部でのスタートから参加し、SPとしてのキャリアを積んできた人の中には、新しく参加したSPが、専門職の基礎教育に地域住民であるSPが参加する目的を十分に理解していないのではないかという懸念を持つ人がいた。SP間で軋轢が生じないようにし、それぞれが支え合えるようなグループにするために、看護基礎教育の授業にSPが参加する目的を繰り返し伝えて共有するようにした。

② 説明会

説明会では、大学の教育理念、看護教育の方針、科目の目標・概要を説明した。全学においてSPの取りまとめをしており、当初からSPを活用した授業・OSCEを実施してきた千葉教授より、大学教育・専門職育成にSPを導入するねらい、SPとは何か、模擬患者と標準模擬患者の役割の違い、SPとしての心得を伝えるようにした。

表2 看護教育におけるSPの役割

演じる	実習に出る前の学生が患者（対象者）をよりリアルにイメージしやすくするために患者役を演じる。
フィードバックする	演習・OSCEで「感じた」ことを「事実」とともに伝える（事実と感情を分けたフィードバック）。
代弁する	学生に向けて患者の立場として感じていることを市民として代弁する。
コミュニケーション・トレーニング	臨床現場で役立つコミュニケーション能力をつけるためのトレーニングの相手となる。
学生の自己評価	SPが感じた患者の気持ちを聞くことにより、学生の自己評価を助ける。
教育への参画	SPが演習・OSCEに参加することにより、看護教育に地域住民が参画する。

③ 資料の作成

SP用のマニュアルを作成した。病気の学習・シナリオ・ロールプレイ患者設定、演習のねらい、学生の到達目標、演技のポイント、フィードバックのねらい・ポイントを資料として作成した。また、授業・OSCEに参加するにあたり、同意書、情報保護の誓約書等、必要書類の作成をした。

④ SP演技練習会及びOSCEの試行

看護師や大学院生がSPとなり、実際に演技練習会、OSCEを実施した。シナリオの説明の詳しさを所要時間の調整、演技の練習方法や準備するシナリオ（台本）に工夫を要した。教員がはじめにポイントを示しながら、デモンストレーション演技をし、練習用台本を用いて各自がロールプレイをする方法が有効であった。

2) 平成26～27年：SP参加による演習・OSCEの実施

平成24年～25年の準備期間を経て、平成26年度4月より、SPを活用した授業科目がスタートした。授業計画に合わせて内容を構成し、SPの育成と参加をすすめた。

3) SP活用の演習・OSCEの評価

SPを看護教育に導入することによって、学生にとっては患者理解が深まること、看護知識・技術の向上、学習意欲が高まることなどが期待されるが、SPにとっても教育に参加することの充実感や、社会に貢献する満足感などを得られることが期待できる。

SPの視点から、演習・OSCE参加の評価をするために、授業終了後10分程度、OSCE終了後30分程度の振り返りを行った。SPから、感じたことを発言してもらうとともに、無記名のアンケートを行った。意見やアンケートの結果から、SPの参加に関する調整や、フォローアップについて改善した。

表3 SPの育成と参加手順

<p>1. 全体説明会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本学の教育理念と学習過程 ・ SPの役割と期待されること・・・全学SP担当教授（歯学部）より ・ 看護の役割・看護学科の教育目標 ・ 看護実践演習 科目の概要と目標 SPの参加内容 ・ 演習及びOSCEの日程
<p>2. 演習にむけての演技練習会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業（演習）について ・ フィードバックについて（お願いしたいこと） ・ ポジティブフィードバック 感情と事実を分けて伝える ほか ・ 課題に対する講習・デモンストレーションの練習 (患者役の練習, 学生へのフィードバック練習)
<p>3. 演習当日</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オリエンテーション ・ 演習参加 ・ 演習の振り返り, OSCEについての打ち合わせ
<p>4. OSCEでの演技練習会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ OSCEについて ・ フィードバックについて 学生一人1分以内のフィードバック ・ 課題に対する講習 デモンストレーション ・ パフォーマンスの練習 (ロールプレイ) (患者役の練習, 学生へのフィードバック練習)
<p>5. OSCE当日</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オリエンテーション ・ OSCE参加 最少人数20人 準備人数25人
<p>6. 全体の振り返り会 振り返り OSCE当日 実施後 SP・教員合同</p>

Ⅲ. 実施評価の結果と考察

1. SPが演習・OSCEに参加することの楽しさと意義

前述したように、SPには演習・OSCE終了後にそれぞれ無記名のアンケートを実施している。演習参加後のアンケートでは、SPの70%が演習で患者役を行ってみて「とてもよかった」と回答している。「全くよくなかった」「あまりよくなかった」と回答したSPは1人もいなかった。また、「とてもよかった」と感じられた理由としては、「学生と触れ合うことができ良かった」「学生が日々一生懸命、勉強している様子を見ることができた」「少しでも学生の手助けができていると思う」というものであった。

OSCE参加後のアンケートでは、OSCEで患者役を行ったSPの56.5%が「とてもよかった」、43.5%が「まあよかった」と回答していた。「全くよくなかった」「あまりよくなかった」と回答したSPは1人もいなかった。また、「とてもよかった」と感じられた理由としては、「学生さんのお手伝いになるのならやりがいを感じる」「一生懸命な学生に接し、こちらも頑張る役に立てるようにしようと思った」「学生の一生懸命さにパワーをもらえる」などで、演習参加後のアンケートと共通するものが多かった。

このように、SPは演習・OSCEを通して様々な学生と接することで学生への理解を深めていた。また、学生だけではなく、学生を育てようとする教員の姿を見ることができるといった感想もあった。以上のアンケート結果や自由記載から、地域住民が医療大学と関わることで人を育てる喜びを実感し、SP自身が大学の教育に参加することの楽しさや意義を見出しているものと考えられる。

2. SPが演習・OSCEに参加することで感じる難しさについて

1) 学生を育てるための効果的なフィードバックの難しさ

SPが演習・OSCEに参加し、共通して感じていることがフィードバックの難しさである。学生へのフィードバックとは、事実とその時に感じたSP自身の感情を伝えることである。「もっとこうして欲しい・こうした方が良い」などの指導はフィードバックではない。SPは自分の感情を伝えることと指導することの違いが理解できず、練習会では学生へのフィードバックが難しいとの声がよく聞かれる。また、頭では理解できていても実施の段階になると難しさを感じる

SP も多い。

演習に参加した SP の20%が「学生へのフィードバックは難しくなかった」の項目で「あまり思わない」と回答していた。自由記載欄にも「フィードバックが難しい」「自分の言葉で学生が泣いてしまった」「ことばの発想力、表現方法の練習が必要」との回答があった。また、「患者役を行ってみて疲労は感じなかった」の質問に対して30%の模擬患者が「あまり思わない」と回答しており、学生の緊張感や SP 個々の思いやフィードバックに対する学生の反応が SP の疲労感につながったものと考えられる。

2) 演習と OSCE での演じ分けの難しさ

SP は演習参加の際には比較的自由度が高い演技をしているが、OSCE ではシナリオが準備されている。具体的には、演習時にはどのような患者であるのか、といった状況設定がされているだけであり、その状況に学生がどのように受け答えしたとしてもその後の

SP の演技にはほとんど影響しない。しかし OSCE では、SP は用意してあるシナリオをその通りに演じるために OSCE 当日までに複数回の練習が必要となる。さらに、学生の反応が SP が予想していないものであると、SP はシナリオ通りに演じることがさらに難しくなる。

OSCE 後のアンケート結果では、「患者役を行ってみて疲労は感じなかった」という質問には21.7%の SP が「あまり思わない」と回答しており、これは演習後の同じ質問の結果とほぼ同じであった。また、OSCE は試験ならではの緊張感があること、厳密に点数化されることから、自分 (SP) が上手に演技出来なかったせいで学生に不利な評価となってしまわないか、という心配が SP 自身の緊張感をさらに高めてしまう要因となっていると考えられる。アンケート結果を一部抜粋して表4に示した。

表4 「看護実践演習」演習・OSCE 後アンケート結果

演習・OSCE への参加について、1. まったく思わない、2. あまり思わない、3. まあそう思う、4. そう思う、より該当するものを一つ選んでもらった。

<演習後>

質問項目	平均値
1. 学生へのフィードバックの時間は十分だった	3.75
2. 学生へのフィードバックは難しくなかった	2.95
3. シナリオは患者役を行う上で役立った	3.9
4. シナリオの情報量は適切であった	3.9
5. 患者役を行うことにやりがいを感じた	3.9
6. 患者役を行うことにより、学生の成長を助けている実感を得た	3.8
7. 患者役を行うことを通じ、自分にも学びになるものがあったと思う	3.95

<OSCE 後>

質問項目	平均値
1. 学生へのフィードバックの時間は十分だった	3.7
2. 学生へのフィードバックは難しくなかった	2.96
3. シナリオは覚えやすかった	3.3
4. シナリオの用語は理解できた	3.65
5. 患者役を行うことにやりがいを感じた	3.83
6. 患者役を行うことにより、学生の成長を助けている実感を得た	3.7
7. 患者役を行うことを通じ、自分にも学びになるものがあったと思う	3.87

<患者役を行ってみて感じたこと> ※自由記載欄より、一部抜粋

演習後	OSCE 後
<ul style="list-style-type: none"> ・感じのよい学生さんばかりだったので、演じやすかったです。 ・楽しく患者役を演じることができました。学生さんへは、フィードバックでお手伝いできたかと思えます。 ・フィードバックはやはり難しいと思いました。 ・学生の緊張が伝わり、自分も緊張感がありました。 ・少しでも学生たちの役に立てると思うと満足感を感じます。 ・学生さんの感想を聞いてみたいと思います。 ・学生の皆さんから学ぶことも沢山あります。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大変学ぶことが多くてありがたいです。 ・学生がみんな真面目だと思いました。 ・こちらも緊張するけど、それが学生さんに伝わらないよう気をつけました。 ・看護学科の OSCE は実践型ですね。本物の患者になったような気が毎回します。 ・素晴らしい教育が行われているところにほんの少し入ることができて感動です。 ・学生の一生懸命さがよくわかりました。 ・色々な学生と出会えて、新鮮でした。

3. 今後の課題

1) 学生を育てるための効果的なフィードバックの難しさ

前述したように、SPが難しさを感じている学生へのフィードバックの方法については、SPの演技練習会の際に繰り返し説明した。また、練習会の際にはSPにフィードバック用シート(表5)を配布し、それをもとに実際に教員やSP同士でフィードバックの練習を行った。説明会・練習会に配布する説明資料についてはその年度の反省を活かし、少しずつ内容を変

更するなどの工夫を行った。しかし、そのような取り組みをしてもSP全員が同じようにフィードバック出来ているとは限らない。練習会では適切なフィードバックが出来ていても、実際の演習では難しい場合もあった。このため、今後もSPが学生にとって効果的なフィードバックができるよう、資料の工夫や練習会での新たな取り組みは必要である。また、SPのフィードバックを否定せず、効果的なフィードバックとなるような指導方法について教員も考えていく必要があるといえる。

表5 SP用フィードバックシート

フィードバック項目	具体的な学生の言動	そのときの感情
身だしなみ・態度・言葉遣いを どのように感じましたか?		
・服装, 髪, 化粧		
・表情, 視線(笑顔など), 姿勢		
・丁寧な言葉, 声の大きさ・スピード・トーン		
あなたの反応を確認しながら観察や測定, あるいは介助をしていましたか?		
・症状や苦痛の観察・確認		
・疑問や理解の確認		
・傾聴(あなたの訴えを聞く様子)		
・測定や介助の丁寧さ		
説明のわかりやすさはいかがでしたか?		
・用語の使い方(専門用語の使い方)		
・詳しさ(詳しすぎる・簡単すぎる)		
・根拠(なぜそうするのか)の説明		
メモ		感情の例
P(よかったところ)		不安になった 情けない気持ちになった 申し訳ない気持ちになった 焦ってしまった
N(よくなかったところ)		戸惑った もどかしいと思った 安心できた ありがたいと思った
P(はげまし)		満足感があった 落ち着いた気持ちでいられた

2) 演習と OSCE での演じ分けの難しさ

今後の課題としては、OSCE の運営方法、とりわけ SP がシナリオ通りに正確に演じることができるようなシナリオ設定について考えていく必要があるといえる。シナリオが複雑ではなく、誰もが演じることが可能であり、かつ同じような水準での演技ができるということがシナリオを作成する上で重要である。また、今年度は SP への OSCE の課題の提示が OSCE 当日 2 週間前であったことから、今後は提示を早めに行えるよう準備することや、練習会の日程を増やすなどの取り組みも必要である。

3) 模擬患者参加型演習・OSCE について

SP の質を維持し、参加者が達成感を持って継続していくためには OSCE だけではなく、演習に参加することが重要である。演習に参加することで、SP と教員と一緒に学生を育てているという感覚を持つことが出来るのであり、演習というある程度自由なやりとりの中で学生と SP のお互いが成長することが出来る。OSCE だけではなく、演習に SP が参加したことでより効果的な学習かつ SP の質の維持・達成感の確保が可能になったといえる。

しかし、現状のままでは SP 会そのものの高齢化が進み、演習には参加できても OSCE の参加は断りたいという SP が出てくる可能性がある。SP 会を継続していくためには、新しい人材の協力が欠かせない。現在の人材の確保は、すでに SP 会に所属している SP の友人・知人が加わることで成り立っている。現状としてはこの方法で構成員の不足は生じていないが、引き続き新しい人材確保をしていくことは必要である。

重要なことは、すでに SP 会に所属している人もこれから所属することを考えている人も、「学生を住民参加で育てる」といった共通認識であり、教員と地域住民である SP とが地域貢献として大学の授業や OSCE に参加し、教員と一緒に学生を育てていくため協力し合うことであると考えられる。

文献

日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会編 (2009). 薬学生・薬剤師育成のための模擬患者 (SP) 研修の方法と実践. 1-2. じほう.

鈴木富雄・阿部恵子編 (2011). よくわかる医療面接と模擬患者. 38-75. 名古屋大学出版.

受付：2015年11月30日

受理：2016年2月26日